

命を懸けた勇気（2）

人を助ける為には、自分の体を一步前に押し出す力が必要です。そしてその力の源は、人を「助けたい」という強い意志（使命感）と二つの勇気が必要だと思っています。

第一の勇気は、困っている人を見た時、救いの手を差し延べる小さな勇気です。

例えば、貴方は目の見えない人が電車に乗ろうとしているのを見つけた時、さりげなく手を取ってエスコート出来ますか。

例えば、電車の中で、目の前に赤ちゃんを抱いた若いお母さんが立った時、さっと席を譲ってあげる事が出来ますか。

こんな一見簡単に出来そうな事でも、いざとなると意外に難しいものです。

「そんな気遣いをしても、自分の得にならない」と考える様な人は論外ですが、そうでなくても他人の目が気になったり、ちょっと気恥ずかしかったりという気持ちで働いて、つい見て見ぬふりをしてしまうという事が、往々にしてあるのではないのでしょうか。やりなれない事をするのは大変ですし、傍観者でいる方が、大抵は楽が出来ますからね。

そうした自分の殻を打ち破るには、自分の中にある小さな勇気を奮い起こし、優しさを行動に移して行くことを積み重ねて行くのが大事ではないかと思います。

もう一つの勇気は、命の危険に晒される様な大変厳しい状況の中に自ら身を置く勇気です。

これには余程の勇気が必要だと思います。

川で溺れている人を助けようと思えば、泳ぎに余程の自信がなければ川には飛び込めないと思います。そうでなければ、溺れている人を助けられないどころか、自分も巻き込まれて溺れてしまうかも知れないからです。まして、電車が近づいてくる踏切の中に走り込む事は、普通は出来ません。時間的な余裕が殆どない中で、助けに入った自分も事故に巻き込まれてしまう可能性が高いからです。

奈津恵さんが、危険を顧みず踏切内に入ったのは、「助けなければ」という思いが、強烈に自分自身を突き動かしたからに違いありません。

ただ、人を助けようとする思いと勇気は誠に尊いものがありますが、しかし、如何なる場合も自分の命と引き換えにするような事はあってはならないと思います。だから私は、奈津恵さんの勇気を讃えながらも、彼女が男性に代わって犠牲になっ

た事を悲しみます。

命がけで救出に当たるという事と、自分の命を犠牲にして救出に当たるという事とは天と地ほどの差があるのです。

消防士や機動隊の様に、遭難者を救出するためのプロは常に命の危険に身を晒しながら、同時に、2重遭難を避ける為に慎重を期して行動します。危険に対して慎重である事は、恥すべき事ではありません。

奈津恵さんは、人を助けるという思いだけではなく、実際に人を助ける為に自分の命を懸けて行動しました。私達がこの出来事から学ぶべき事は、多いのではないのでしょうか。一時の感情に流される事無く、人を助けるという事の重さについて、しっかりと考えて行きたいと思います。

村田奈津恵さんの父、恵弘さんと母、春子さんは告別式後、報道陣に次の様なコメントを発表しました。

本日、娘、村田奈津恵の葬儀を執り行いました。

多くの方々にお忙しい中、また遠い所をお越し頂き有り難く心より御礼を申し上げます。

娘と最後の別れをしたことで、娘はもう私どもの手元に戻っては来ないのだ、とあらためて悲しみを感じております。しかし、こんなにも沢山の皆様方が奈津恵の死をご一緒に悲しんでいただいている、というのは奈津恵にとりましても、また私どもにとりましても、幸せなことと存じます。奈津恵は自分の心に正直に、信念をもって行ったことですので、私どもも奈津恵を見習って、しっかり生きていこうと考えております。最後の別れはしましたが、奈津恵はいつまでも私どもの心の中に生きている、と思っております。(以下略)

奈津恵さんのご冥福を、心からお祈り致します(合掌)。(塾頭：吉田 洋一)